第5回中野区基本構想審議会　部会（子育て・教育）

〇開催日時　　令和元年8月15日（木曜日）19時～21時

〇開催場所　　中野区役所7階　　第10会議室

〇出欠者

1　部会員

出席者

和泉 徹彦（部会長）、新庄 惠子、相川　梓、安藤　文隆、今村　亮、

猿田　えり子、城山　智子、染谷　安紀子、能登　祐克

欠席者

藤本　飛鳥

2　中野区

企画部

基本構想担当課長　　永見　英光

子ども教育部

子ども・教育政策課長　　永田　純一

保育園・幼稚園課長　　濵口　求

児童相談所設置調整担当課長　　半田　浩之

指導室長　　宮崎　宏明

**【議　事】**

**〇和泉部会長**

それではただ今より中野区基本構想審議会の子育て・教育部会第5回を始めさせていただきたいと思います。

本日は、藤本委員からご都合によりご欠席とのご連絡を受けております。また今村委員、能登委員に関しましては遅れてお見えになるという連絡を受けております。半数以上の部会員の方にご出席いただいておりますので会議は有効に設置しております。終了の目途は9時としたいと思いますのでご協力の程よろしくお願いいたします。

本日は子育て教育部会最後の会となりますので、部会の審議内容のまとめをしたいと思います。まず、本日の配付資料の内容について事務局より説明してもらいます。

○永見基本構想担当課長

それでは私から説明をさせていただきます。次第の裏面に、資料の一覧ということで記載をしてございます。資料１「子育て・教育部会の審議内容」、資料２「新しい基本構想を考える職員プロジェクトチーム提案書」を配らせていただいております。それではそれぞれご説明をさせていただきたいと思います。

資料１の部会の審議内容でございますけれども、次回９月 27 日に全体会がございますので、そこでは答申の案文のような形となり、それを９月と 10 月の全体会で調整をしていくことになります。答申の作成に向けて、これまでマトリクスのような４分割した形でまとめさせていただいておりましたけれども、文章の形でまとめさせていただいております。

４つの重点テーマ単位で分類をさせていただいておりまして、書き方としてはテーマがあり、そのあと○が幾つかあると思うんですけれども、○ごとに必要性などについて書いた上で、こういった状態を目指す。こういう状態がいいということが書いてある、といった書き方になってあります。これまでのマトリクスには答申のイメージという言葉がありましたけれども、少し文章を精査したり統合したりとか、若干付け加えたりした部分もございますので、そういった目で、改めて振り返っていただければと思っております。

ざっと触れていきますと、最初の「子育てが楽しくなる地域環境」につきましては、保護者目線での地域環境も必要ですけれども、子ども目線で子どもが暮らして楽しい地域環境が整っていることが重要ではないかというようなこと、それから二つ目の○ですけれども子育てにやさしい地域環境の必要性、それから保護者の子育てに悩んでいる方などが気軽に相談できる環境づくりのこと。それから子ども自身のことですけれども、異なる年齢の子ども同士の交流であったり、子ども同士がある問題解決したり、実践したりする場が必要ではないかということ。それから様々な事情を持つ子どもが見守られ安心して過ごせる場の整備の話です。

２つ目の重点テーマ「子どもの命と権利の保護」でございますけれども、児童相談所の設置がございますので、そういう一貫した相談支援体制を構築していくことが必要であるという話、それから子どもの主体性を尊重した地域社会ということで子どもがみずから意見表明をしたり、それを社会全体で受けとめる体制が必要ではないかということ。

３つ目としては、子どもが自己肯定感を持てるということの必要性です。次のページの最初の○ですが、多様性を尊重していくということで、子ども自身が多様性を尊重していくことが大事ではないかということ。それから不登校ひきこもりというような状態になら

ないための、個々の状況に応じた支援や環境改善の必要性、続いて子どもの貧困に対する支援が必要ではないかということ。それから、学校や保育施設等の外における子どもの安全を確保することが必要ではないかということです。

3つ目の「地域の子育て力」というところで言いますと、子育て家庭の孤立を防ぐためにも地域で見守りの輪を広げていくことが重要ではないかという視点です。続いて二つ目ですけれども、地域の人たちが子どもや保護者のことを知っているということです。そういったことが大事であって、子どもと子育て家庭が地域活動に参加したくなるような仕組みづくりが大切ではないかということ。3つ目としては外国籍の子どもが増えていく、そういった子たちが溶け込んでいくということです。続いて、家庭生活に事情がある子どもが住み慣れた地域で支援をする。そういった取組が必要ではないかということです。

その次は情報の話ですけれども正確な情報が保護者の方に繋がっているということが大事ではないかということでございます。次のページでは、区の情報発信の話ですけれども、魅力を感じる情報であったり、地域の情報を発信していく必要性があるのではないかということでございます。

4つ目が「自らの可能性を伸ばし成長する若年世代」ということで、中高生をまちの担い手としてとらえた取組が必要ではないかということ。それから中高生が実質的に活動できる場の必要性、中高生の意見を行政の取組に反映するような仕組みが必要ではないか。その次が、社会の関わりなどに課題を抱える若者に対する支援ということでございます。

5つ目が、「社会の変化に対応した教育・保育」ということで、待機児童の解消に向けまして、保護者のライフスタイルに合った多様な保育サービスが必要ではないかという話でございます。それから、多様化する幼児期の教育・保育のニーズに対応するため、区がそういった機関と連携して区全体の教育保育の質の向上が必要ではないかと。また、目まぐるしく変化をしていく社会において、主体的にたくましく生きていく、生きる力を身につけているということが大事だと。それから子どもの頃から体力も高めていくことが求められるということで、体を動かす環境が必要ではないかということです。

最後のページですけれども、地域全体で学校のより良い運営のための取組を進める必要があるのではないかということ。特別な支援を必要とする子どもや保護者が個々の特性に応じた支援を受けることができる体制の整備の話。次が学びの連続性を重視した教育が必要ではないかということ。それからグローバル化が進展していく中で、その社会で生きていくための資質や能力を育む教育が必要ではないかということ。それからＡＩなど、技術

の進展により、ＩＣＴ等の知識を持つ地域人材や大学、企業などとの連携を進める必要があると。最後は、図書館等の必要な知識や情報が得られる場が必要ではないかということです。以上のような形でまとめさせていただいております。

続きまして、職員プロジェクトチームの資料の説明をさせていただきたいと思います。区役所の各部からの推薦と、公募で参加した26名の職員がプロジェクトチームということで、4月からこの8月にかけて4つのチームに分かれて、提案書の作成を行いました。その4つのチームの1つである子育て・教育チームが、色々なデータなどを調べて提案書を作成をいたしました。このチームなのですけれど、若手を中心にして結成したチームでして、荒い部分もあるかもしれませんが、提案内容を反映していければというふうに考えております。これまでの部会でのご審議に沿っている内容が多いのかなと思っておりますので、どのような形で反映していけるのか、という目線でご意見等いただければ幸いでございます。

子ども、保護者、地域、学校という4つの視点でまとめております。子どもの視点での現状は、区では様々な教育施策を講じていて、学力、体力ともにここ数年間は向上傾向にあるということでございます。その一方で、外国人児童が増えたり、特別支援学級の在籍児童生徒が増えたり、また、いじめ・不登校、そういったものも出現はしているという状況がございます。中野区の強みとして、子どもたちの成長学びを支える主体が、大学や企業やNPOなど、たくさんございます。それから区としても、多様性を受容する取組を進めているということ。

一方で弱みとしては、例えば公園が狭かったり、多様な子どもたちが体験できる環境が限られているということ、学区制を導入しているのが23区の中では少数派であること、外国人児童生徒に対する対応にも今後の課題があるのではないかということでございます。

将来像としては、3つ掲げております。1つがすべての子どもたちが新しい時代を生き抜くために必要な力を確実に習得しています。続いて、子どもたちは互いの個性を理解し相手を尊重することができるとともに、自分のことも大切にすることができています。3つ目として子どもたちはそれぞれが得意とすることや好きなことに関する能力を高め、その力を発揮することができています、ということでございます。

保護者の視点では、区の人口分布などを見ますと、子育て家庭が子どもとの成長とともに区外へ転出しているということが考えられるという前提に立ちまして、その要因として、住宅が狭いところであったり、共働き世帯が増加しているということで子育てへの不安を

感じやすい環境にあるのではないか、ということも指摘をしてございます。また児童相談件数も増加傾向にあって、悩んでいらっしゃる保護者の方が多いということで、戸惑いや不安感が解消される機会が必要ではないかという提案でございます。将来像といたしまして、区内で子育てする保護者はそれぞれが望ましいと考える環境の中で子育てを行っています。続いて、保護者がもつ、子育てにおける戸惑いや不安感が保護者同士や地域との交流により解消されていますということでございます。

3つ目の地域という視点でございますけれども、近年の社会環境の変化などによりまして家庭の中だけで子育てすることが難しくなっているということを設定しておりまして、地域全体での子育ての重要性を子ども・子育て支援事業計画においても唱えているということでございます。10年後に目指す姿として、地域の子育て団体が連携、情報共有し、子育て世帯がすぐに地域の子育て支援団体や情報を入手できる環境が整っています。続いて、高齢者や企業（店舗）、自治会等の地域全体で子どもの成長を見守るまちとなっていますということでございます。

最後に、学校という視点でございますけれども、子どもたちを取り巻く環境として高度情報化社会ということでスマートフォンであったりインターネットなどが普及している一方で、それによるトラブルなども生じているということでございます。また教員の多忙化、長時間勤務も課題なのではないかということでございます。10年後に目指す姿としては、子どもたちが情報化のより一層の進展に対応し主体的に情報を選択し、活用し、発信するとともに、人間関係や直接体験を充実させ、豊かな人間性や社会性を育てています。続いて、十分な支援により教員が授業に専念し、子どもたち一人一人と向き合った質の高い指導がなされています。

このような形でまとめてございます。表現等も少し部会と違う部分もありますし、どのような形で、反映していくかというところでご意見いただければ幸いでございます。以上でございます。

**○和泉部会長**

ありがとうございます。それでは部会の審議内容のまとめについての審議に移りたいと思います。これまでの部会の審議内容を資料1、子育て教育部会審議内容にまとめていただきました。先ほど説明のあった職員ＰＴ提案についても参考に、審議内容に不足はないか表現に違和感はないかなど、ご審議をお願いいたします。

また第2回の全体会では、3つほどご意見をいただきました。1つ目は、経済的に困難な

状況の子どもへの支援。2つ目は、中高生の居場所のあり方、中高生の地域での役割について。3つめは小中学校施設のあり方、教職員の資質の向上といった内容でございました。これらについても踏まえて、何か不足がありましたらご意見いただければと思います。

**〇相川委員**

資料1の子育てが楽しくなる地域環境の3つ目の〇のところなのですけれども、保護者の誰もが子育てに関する悩みや不安を感じるので､相談できる環境づくりが必要であると。共感できる場所、息抜きできる場所、というのも大変重要だと思うのですけれども、プラスして実際の具体的な、場合によって支援に繋がる環境が整備されているという、文章を追加できると良いと思います。相談するだけではなく支援、それは自治体であってもいいし、地域の団体でもいいと思うのですけれども、具体的に支援に繋がる環境づくりが進んでいる、発展している、用意されているというような表現を加えられないかなと思いました。

**〇和泉部会長**

実際に、次のアクションに繋がるものですね。そういったものについても加えた方が良いというご意見でした。

**〇新庄委員**

審議内容や発言内容をきちんとまとめていただきましてありがとうございました。まとめについての質問ですが、この5つの観点に従ってまとめていただいていますけれども、最初に、「重要である・必要である」ということを言って、それから「何々している、できている」というように「10年後の将来はこういうふうになっている状況が望ましい」という形で書かれているのでしょうか。

**〇永見課長**

そのような形でまとめたものでございます。

**〇新庄委員**

最初の部分の「何々が必要である、何々が重要である」ということと、必ずしも後ろの文言が呼応してないようなところもあるのですが、そのところは付け加えたり、文言を考えたりしたほうが良いととらえて良いのでしょうか。

**〇永見課長**

今までの答申のイメージという言葉などを、できるだけ生かすような形にしているところもあるのですが、不自然なところがありましたらご指摘いただければと思います。

○新庄委員

わかりました。ありがとうございます。

○城山委員

職員の方が議論をしてくださった内容も盛り込まれていると思うんですけども、例えば、学校の姿について、将来はどうなったらいいかということなんですが、私は、中国の研究をしているので、中国の学校と日本の学校比べると、一番大きく異なるのは、日本は横並びで学校間の競争がすごく少ないということなのです。中国は、公立でもいい学校にはお金も投入するし、競争をさせるし自由度が高い。私立みたいな学校もあります。日本がそれぞれの学校の独自性と自由度をもっと高めて、学校のニーズに応じた改革や、先生の独自性をもっと高めていければ、競争力も増すし、下から上がってくるニーズを取り入れていく力もつくと思います。

今日来る前に、麻布高校のシステムについて書いた文章読んでいたのですけれども、例えばフレックスタイム制で午前中は来ない先生もいるし、極端ですけれども、生徒が抜け出して遊んでいる生徒も多いとか、自由度が高い学校だそうです。それは学級崩壊に見えるところもあるけれども、自分たちの自主性があって、やがては、いろいろな道に繋がっていくということを高校の特徴として打ち出している。私立でも開成などはまた違う。ディシプリン（規律）などを重視するなど、いろいろあると思うのですけども、公立ももう少し自由度を高めて、学校ごとの独自の取組を認めるような姿を描いてもいいのではないかと思います。

特に中野って特徴のある小学校・中学校があまりないと思います。他の区でよく取りあげられている麹町中学校、世田谷にある桜丘中学校など、そういうところは、校長先生も独自の考えをもっていて、そういうものがいい影響を与えていく可能性もあるんじゃないかなと思います。独自性をもっと学校や校長に持たせて、保護者や地域もそういう中に入っていけば、いろいろな独自のユニークな取組というのが下から出てくると思うのです。

横並びで、横とか上ばかりを見ているだけだとやっていけないのです。特に中国の学校などは、下からの力がすごいんです。公立なのに自分たちでいろいろなお金を稼ぐというか、学校が独自に利益を上げて、それをカリキュラム開発にまわしたりだとか、教材開発にまわしたりだとか、それによって、先生のインセンティブを高めていきます。そういうふうに自由度を高めると、先生たちも忙しいかもしれませんけど、自由にできる範囲も広がっていきますから、休む時間も柔軟に作ることができるようになります。中野区として

は、そういった学校や先生の独自性を、どのようにお考えでしょうか。

**〇宮崎指導室長**

今のような学校の独自性に関わるような考えは、おそらく今後日本の学校でどんどん議論が進んでいくと思います。今ご指摘ありましたように、すでに区によっては、そういう学校を作っていくという方向が出されています。大きな流れとしてはそういうような方向に行くという大前提がある一方、なかなかそこに行かない一つの理由として、やはり日本の学校がすべてのことを担わされていることがやはり大きいと思います。他国の学校のように学力だけつければよいとか、何とかだけやるとかいうことではなくて、子どもの生活から何からすべて学校の責任になる。勉強だけに向いていればいいというわけではなく、先生たちはオールマイティーに子どもを管理していかなければならない。本来家庭が負うべき、地域が負うべきところまで負っている。中野は非常に地域が生きていますし、あたたかい地域もありますから。そういう中で育まれているという良さもありますが、やはり学校の負うべき役割が大きいです。

校舎が新しく綺麗な学校もありますが、やはり財政的な裏付けも今後必要になってくると思います。新しい学校をたくさん建てている区などは、いろいろ選べますが、中野区の場合だと、まだ新しい学校が少ないので、学校が新しく綺麗になるとそこに集中するような傾向があります。ですから中身で勝負していくためには、今働き方改革も叫ばれているので、学校が担うべきことを整理して、先生たちが工夫していく余地をつくっていくという点と、それからやはり財政的な裏付けであるとか、そういう学校や経営者を支援するようなシステムを作っていく点が重要と思います。

ただ、日本全体としては、そのような方向にいっていますけれど、麹町中学校と中野の状況を単純に比較するのも地域性という点から難しいですし、日本の公立学校では機会均等などを大事にしてきたということもあります。子どもたちだれもが日本中どこにいっても同じ教育が受けられるという点が重要だとする考えもありますので、こうしたことと整合をとりながらも、今後はますます学校の特色や独自性を伸ばしていく方向にいくと思っています。

**〇新庄委員**

今、指導室長にご説明いただきましたが、確かに公立学校ができる自由度というのは限られたところがあります。全国的に同じ水準の教育をしていかなくてはいけないというところがいい面でもあり、そうでない面でもあると思います。おそらく 20 年以上くらい前か

らでしょうか、公立学校へ進む子どもたちが少なくなってきている傾向がみられます。

特に都会・都心部の場合は私立学校を受験する子どもたちが多いので、公立学校は魅力ある学校づくりや特色ある学校づくりのために様々な取組をしてきています。

前回お話にも出ていたような、例えばコミュニティスクールのこととか、そういうものが先ほど委員がおっしゃっていたようなことが含まれるという感じはします。指導室長のお話のように、おそらく中野区も様々な特色ある学校づくりのための取組をされているのではないかと思います。財政面での課題もあると思いますが、学校の特色づくりや、魅力ある学校づくりなどの文言が入ると良いと思いました。

**○和泉部会長**

私からも今のテーマについてお話させていただくと、「自らの可能性を伸ばし成長する若年世代」のところが、少し薄いような気がしないではないのですけれども、やはりそこは区として関わる中高生というのが見えにくくなっている。学校にある程度吸収されている部分、あるいは先ほど新庄先生がおっしゃったような中高の段階で、すでに私立だったり国立だったり、あるいは都立中高一貫校、小中一貫校といったもので吸収されている部分があって、なかなか区としてグリップしにくいというところがあるのかなというふうには感じるんですね。

実際、中野区の小学校を卒業して中学校に進学する時点で2割程度の方は抜けるわけです。そういった中で中高一貫校に進む、それは都立だろうと私立だろうと、その独自の教育をやっていて、そこに魅力を感じ、そこの多様性というものをやはり評価した上で、進学をしていると、そういう現状があると。では、そういう選択をしなかった子たちに対して中学校がどういう教育を提供するのかといったときに、たまたまそういう機会がなかったし、知る機会がなかったという形で進学するのか、それともあえて公立中学校がいいのだと、地域の学区の中で生活する中で進学していくのがいいのだと、そういう選択を選んだのか、そういうような、様々な事情というのをかんがみた上で、評価をしなきゃいけないのかなと思います。

つまり、いろいろなものが多様化してしまった中でどれを選ぶかわからない、選択肢が多すぎて選べないという問題が出てきますので、そういった意味での、最低限の標準的なものを維持するという意味での公立学校の意義というのは、ある程度あるのかなと思います。一方で多様化した選択肢というのがしっかり選べる状態、こういう選択肢があるんだということを知る機会、というのを塾任せにしないというのが現在必要なのかなと思うわ

けです。

**○今村委員**

中高生の話題に関連して、「自らの可能性を伸ばし成長する若年世代」の項目の中で四つの○のうち、3つに中高生等を主語にした書き方にしていただいて、ここに意欲を示せたのはよかったなと感じております。付け加えて私も重要だと思うのは、とらえにくい中高生という存在の定義です。中野区に在住している中学生・高校生も当然もちろんなのでしょうけれど、在住しながらも、区外の学校に進学する子どもたち、一方で他区に在住して中野区の学校に通ってくる中高生もいたりと、この輪郭が非常におぼろげな中高生を、中野区はどの中高生に向き合っていきますか、ということが考えていくべきテーマかなと感じました。そこまで具体的なことを基本構想に書くかというところまで踏み込めたら良いと思います。

私としては中野区に通ってきてくれる中高生も重要な中野区の担い手であり、中野区が支えたい子どもたちではないかと考えています。

それから、2つ目に学校の枠を超えてという書き方があることにはすごく自由さがあっていいなと思いつつも、ともすると学校と対立するようなことが起き得ないとも言い切れないと思いました。学校教育の中で重要とされている校則やルールなどの規範と、学校外で行われる活動の規範みたいなものがきちんとすり合わせられるように、学校と連携しながらこういうことをやっていくというような書き方になる方がいいかなと感じました。

3つ目に、放課後の問題というのを書いていけないかなと感じました。小学校においてはキッズ・プラザや遊び場などの問題、または学童の問題でもあり、中高生においては、部活動等に所属しない地域での活動の場ということでもあろうと思いますし、小中高という学齢においては、放課後を区がどう見ていくかということは一つ、何かさせていくぞという、指針を示せるといいと感じました。

**○相川委員**

今のお話に関連するかもしれないのですけれども、「自らの可能性を伸ばし成長する若年世代」について、またもっと若い世代、小学生、乳幼児も含め、子どもが将来に対して夢を持っていたり、将来に希望を持っている状態であるというような文章をどこかに入れられないかなと思いました。

もちろん中高生の、今そのときがとても楽しい・充実しているというのも大事だと思うのですけれども、もっとしっかり大人になりたいな、将来の夢をこうしたいな、それにつ

いてこういう取組をし、選択肢があると思えて、それに向けて努力しようと思えば、多様な選択肢の中から選んで努力できる環境が整っているというようなことをいえるといいと思いました。もちろん悩んだりしていることを支援するということもとても大事なのですけども、夢を持って子どもたちが生きているというようなことを入れたいと思いました。

**〇和泉部会長**

冒頭にも触れさせていただいたんですけれども、全体会の中で経済的に困難な状況の子どもへの支援、というのがありました。資料１の２ページ目の３つ目のところです。子どもの貧困に係る支援が必要であり、子どものいる生活困窮世帯の支援が地域全体で行われている、という表現ですけれども、ここについては何かご意見ございますでしょうか。

**〇相川委員**

貧困問題に詳しいわけではないのですけれども、中野区でその実態調査もやるというふうに伺っていますし、生活保護世帯に対して、支援もされている体制が整っているとは思います。ただ今後も格差が広がっていくかもしれないと言われている中において、例えばもっと細かい話ですけれど、中野区の保育園、３歳児以上無償化が始まると思います。その時に給食費どうするかということ。また、小学校に入ってからも教材費を払わなきゃいけない、給食費を払わなければいけない。生活困窮世帯について、支援はもちろんあるとは思うのですけれども、本当にぎりぎりのラインの方たちを支援するため、例えば一つの案ですけれども、全員給食費無料にするですとか、そういった大胆な発想というのも、議論をしていける環境があってもいいのかなと思います。

**〇城山委員**

前にも少し言ったのですけれども、こういう子育てとか教育の活動を活性化することが、地域の地域力というか、経済にもよい循環を及ぼすというような形にしていければ、とてもいいと思います。、私も基本的に自分の子どもを公立に入れたいと思いますが、私立と違って公立のいいところは、いろいろな層の人といろいろなことを学んで、お互いに助け合ったり、社会のために役に立つというのはどういうことか学んだりしていくことができるところにあります。そういうことをここに書いていらっしゃいますけれども、それがひいては、地域力や経済力に、中野の全体に繋がっていく。私の子は３年生になりまして、もう学童クラブをやめたのですけれども、中野区で主催している活動など、いろいろな活動に参加していますし、お母さん同士で交代して、いろいろな博物館に連れて行きます。いろいろな家庭の方がいらっしゃるんですけども、そういうことをやりながら、すごく自分

の世界も広がるし、活動の幅も広がっています。子育て・教育の分野とその他の活動が繋がり、経済・地域力を高めるという良い循環に関するイメージをどこかに入れられないでしょうか。それが、公立の強さだと思うのです。社会の中でいろいろな子どもたちが一緒になって社会の問題を考えて解決していくというところが。

**○安藤委員**

今のご意見などを伺っていて、一番感じたのが、今子育て世帯の経済が大変だということで、今回政府では幼児教育の無償化ということで、思い切った政策を作ったわけですが、その中で子どもの貧困をどうやって解決していくのだろうか。それからもう一つは、経営者自体の問題になってくるんですれけども、経営の方も成り立っていくのだろうかという心配も出てきています。

その中で、子どもの貧困を解消できるのか。それから質の高い保育というのは、その経済的な部分で果たしてどの程度の影響があるのだろうかと。質の高さを求めていくということが、施設支援にはなっていないわけです。

経営者として、保育料の無償化というのは大きな問題で、大きな課題です。子どもの貧困というのが、本当にそれで解決できるんだろうかということが、非常に疑問視されるわけです。我々も一生懸命に教育というものの質を高めるために、行動しているつもりですけれど、無償化でどのように変わっていくのか非常に不安な材料の一つでもあります。

この基本構想審議会で、将来を見据えて、どういう位置付けでやっていくのか、求められると思っております。

**○和泉部会長**

子どもの貧困に関して、どのようにまとめの中に盛り込むのかというのはなかなか難しい点があるな、というふうには思っております。というのは子どもの貧困に対して、区が対応する部分と、国と東京都のレベルで対応している部分があって、区でどれだけ関わりができるか、支援ができるかという部分についてというのは、ある程度限られた部分というのがあるのかなというのを感じております。

例えば東京都がやってる様々な支援の中には、高校生に対する授業料無償化も含めた、また私立の高校に対する就学支援といったものがありますので、そういったところは、区が対応するというよりは東京都が対応している部分というのがあります。また先ほど生活保護世帯または生活困窮世帯というご指摘がございましたけれども、そこに関しても、もちろん区が対応している部分、区が現場として対応している部分がもちろんあるわけなの

ですけれども、これはほとんど区の政策というよりは、もう国の政策の中で対応しているというところがございますので、区の独自性というのがどこにあるのか、全体会の中でも少し触れましたけどもやはり子ども食堂のような取組であるとか、そういう民間ベースでの支援のあり方です。あるいは中学生に対する塾の支援など、そういったものについても、東京都も含めて対応しているということがあって、単純に区だけでは対応しきれない部分というのがあるのかなというふうに思います。また安藤委員からご指摘のあった幼児教育の無償化の中で、幼稚園保育所の保育料も無償化されていくという国の政策の中で、区がどう実現していくのかというところもございます。

それらをどう踏まえて、盛り込めるのかというところに関して言うと、区の独自施策と言う部分と、国の全体の施策の部分と、その中でのすり合わせというのをどう反映させようかという話になっているのかなと思います。

**○能登委員**

この話とは直接関係ないのかもわからないのですが、現在中学校に通わせる保護者として、それを踏まえた話なのですが、住む側の人間の話なのでしょうけれど、先ほど公教育の部分で、いろいろな話が出ていたと思うのですけれども、学校の先生が中野区に行きたい、というような気概が感じられないのです。質の問題なのです。公教育というのは日本全国どこでも同じ水準で同じようなことを学ぶということあるのですけれども、学校の特色っていうのは学校の先生方の質によって違ってくると思うのです。

学校の校長先生も、もはや経営者という形でやっていますけれども、経営者によって全く違ってくるというのが見えていますので、中野区がそういう経営者的な感覚の校長先生をしっかり育ててくれる、その校長先生たちがしっかり現場の教員たちを育てる、中野で学んだことを全国に飛び火するようなぐらいの、思い切ったやり方もありだと思います。

ただ、校長先生が有名な他区の公立中学校がありますけれども、この前の修学旅行でその中学校と一緒になったと。ただその生徒たちはアイスを食べながらとか、物を食べながら、駅に集合して、先生の話も聞いてないというこういう状況であったと。ですから革新的な取組をしているのでしょうけれど、それ社会に出たときに、個は良しとしても集合体となった時にまとまりができるのか、不安な問題も当然出てくるわけです。なので、先生も良くて中野の公立に通わせたい、区外から中野区に来たいということがあるのであれば、何が実現一番可能かというのはそういう教員を確保するということです。

東京都なのでしょうけれども、中野区は頑張れば確保できると思いますので、そういっ

たもの、これは書き込めないと思うんですけれども、我々は教育委員会として、こういう方向で中野の子どもを育てるんだと。こんな子どもがいるということはそれなりの保護者が当然集まってくるという形になると思います。ちょっと言葉足らずかもしれないのですけれども、とにかく我々も若い先生方を育てようとします。でも二、三年で異動されちゃうと、これはなかなか難しいのですけれども、できれば経営者と言われている校長先生の質を高めていくための努力はこれからしていかなければいけないと。いい校長先生たちが中野区にそろっていますけれども、いずれの方々も年齢とともに、お辞めになられるということもありますので。今、こちらに書くのはいいのですけれども、同時進行でやってもらいたいなと、これは要望です。

**○城山委員**

公教育というのはどの学校もある程度質を標準化しなければいけないので、私立のようにはしにくいところもあるという話が出ていたんですけれども、例えばそのように校長を中野区が引き抜くことは可能なのですか。教員の異動や校長の選抜に関して、自由度が区にあるのかわからないのですけれど、あるのだったらもっとやるべきだと思います。

**○宮崎指導室長**

今、教員には公募制度というのがありまして、そこにエントリーするフリーエージェントのような制度がずいぶん広まってきていまして、そういう制度を利用するといい先生が集まることもあります。

中野区として期待するところもありますが、こうしたことは他区も考えていますから、そう簡単には思いどおりいきません。公募以外の異動では、一般的に東京都当局は、管理職を含め平準化を図るという傾向があります。

ですから、来て欲しい先生を中野区にだけ全部呼ぶということは、なかなか難しいです。東京都としては、自治体間で質の差異があまり出ないように働いていく傾向にあります。

どこの指導室長も人事担当もいい先生が欲しいし、いい管理職が欲しいですが、なかなか思い通りにならないのが、現状としてはあります。

**○能登委員**

なので、Ａランクの教員を育てて欲しいんです。いずれ中野区に帰ってくるというのは鮭じゃないですけれども、いずれ出なきゃいけないのはわかるので、公立ですから。だけどそういう努力をしていきましょうよという気概です。中野区はこうしていくんだっていう方針がこれだと思うので、その気概を感じないって言っただけです。

○宮崎指導室長

それを感じていただけないのは我々の責任だと思います。今、中野の校長先生方が、非常に教員をよく育ててくださって、ここ１年で管理職を目指す教員が随分増えてきています。他の区ではなかなか管理職候補者が出ないのですけれど、中野区では自分はいずれ管理職になるんだという先生方が増えてきています。中にはそのように見えない方もいるかもしれませんが、中野区の多くの管理職は、自分達が次代を担う教員を育てると思っていますので、今後が期待できると私は思っております。ただ難しいのは、中野区でいい教員に育てると、他の区に行ってしまいます。一旦そこに出ていってしまうとそこの区が離さなければ戻って来られなかったりすることもありますので、我々が涙を飲んでいる現状もあります。

○相川委員

子どもの貧困に関して、今後どうなのかというところなんですけども、ちょうど自分の子どもがこの夏、海の体験事業に参加させていただいたんです。大変よくて、昔は区内の小学校が全員参加されていたと聞いています。それが、震災があって海の方が危険だということもあって、希望者のみになったというふうに聞いています。そのため申し込んで、お金を払った家庭の子どもだけが参加する体験という形になっていて、例えば貧困家庭の方だったら多分そこで申し込むという勇気が出ないんじゃないかなと思いました。そういう活動に対しても、例えば支援ができないかなと。やはり子どもがいろんな体験をするということが、生きる力を育むことになると思うので、学校以外の体験についても支援するような、また声をかけるとか、そういった取組を進めていけると良いと思いました。今は希望者、お金を払った家庭だけだと思っているんですけれど、そこについてはその認識でよろしいでしょうか。

○宮崎指導室長

今日は、担当課が来てないので何とも言えません。軽減なのか免除なのかわかりませんけれども、そういう対策を講じて実際にやっているとは聞いております。

○城山委員

夏休みの今、私も自分の子どもが学童クラブに行かなくなっているので、かなり自由な時間を持っています。お父さんはあんまり参加してないですけれど、こういう活動があってこういうところに子どもを連れて行こうとか、お母さん方との情報交換が盛んで、親がとても役割を発揮しています。そういうところに参加しづらい・参加できない貧困家庭の

子どもたちの場合は、夏休みの活動がすごく貧相になるというか、それこそ食べるものもちゃんと用意してもらえなかったり、体力もつかなかったり。暑い夏ですから、熱中症になったり、いろいろな不安があると思います。

だからそういう時に、カウンセラーとかによる声かけが重要になると思います。例えば民生児童委員の方とかもやっておられると思うのですけれど、まず親がどれぐらいできるかで、夏休みの対策というのが全然違うと思います。親が情報の交換とか、一緒にサポートし合えるようなネットワークを持っているかどうか。私も仕事をやっているので、とても助けてもらって、お母さん友だちが子どもをいろいろなところに連れていってくださるのですけれど、そういう人が周りにいない人なんか大変だろうなと思うんです。そういうところも強化できれば、中野も安心だなと思えるんじゃないかなと思います。何かそういう夏休みの活動をアドバイスするような、そういう制度とかありますか。

**○宮崎指導室長**

社会教育の部分はわからないのですけれど、学校教育の部分だと、教員が夏休み前に勉強や生活など様々な課題について子どもたちにアドバイスしています。夏休みには家庭学習や補修教室のほか、水泳教室があったり、中学校だと部活動があったりと、様々な活動の場を用意しています。それから、我々の所管ではないのですけれども、先ほどから出ている生活に困窮する家庭の子どもたちへの支援として、しいの木塾というのものがありまして、その指導によって学力が向上するなど、その効果がずいぶん出ています。それ以外でも、一部小学校で、地域の方が放課後塾のような活動に取り組んでいるところもあります。

**○城山委員**

学校教育部門と社会教育部門がもう少し連携して、夏休みに入る時に注意しておいたほうがいいなというお子さんについて、社会教育のそのお子さんが住む地域の関連の施設などにつないでいくことはできないのでしょうか。水泳教室以外にも、うちの子どもがいる学校ではわくわく教室とかいろいろあります。ですｋら、学校の中だけでもいろいろあるのですが、学校以外の活動となると、中野のなかだけでも広いので、かなり自分で探していかないとなりません。今日は中部に行こう、南部に行こうとか、送り迎えをしないと危なかったりもするので、親がやはり鍵になると思います。子どもが活発にいろんなものに参加できるかどうか、その辺のサポートに関して、学校教育と社会教育の連携を強化するようなところを入れられれば良いと思います。

○宮崎指導室長

学校では、いろいろなことで情報を得て、例えば、イベントがあるってという、チラシを配ったりしています。よくやっているのは町会などで主催するイベントへの参加を勧めたりしています。こういう映画会があるよ、こういうイベントがあるよ、とかそういうことはお勧めしているのですけれども、やはり夏休み中に24時間すべて学校が子どもたちの管理を担うわけではないです。特にケアが必要な家庭については、福祉関係の機関の方が、各ご家庭に入って、お話をされたり、ケアをしていると思います。

先ほど申し上げた話に繋がるんですけれども、子どもが関わることすべてを学校が担うようになると、本来家庭や地域が担うべきこともやらなければなりませんので、役割分担は必要だと思います。ただし、学校は一切関係ないということではありません。子どもたちのため、できる範囲でやっていますし、今後もやっていきます。

○猿田委員

地域でも地域ニュースなどでいろいろな夏休みのイベントの情報などは流していますし、お祭りがあったらなるべく声かけをして、いろいろな家庭の人に入ってきてもらいたいということで、たまたま家庭生活に課題のある子もお母さんはお祭りが好きで出てくる。そういうところで、そういった子どもとの繋がりを持ったりしているので、地域としてもそういうお子さんたちをなるべく地域に出てきて欲しいということで、努力はしています。

○相川委員

そういった場合に、学校でもなく地域でもなく間の場所として、やはり児童館のような場所というのはとても大事だと思っています。そこで、子どもが夏休み過ごすことができるキッズ・プラザでもいいかもしれないのですけども、その環境がきちんと整っているというのは大変大事だと思っています。その意味でまさに当事者なのですけれども、4年生になって息子が学童クラブを出たら、中野区の児童館は月曜日が休みなんです。夏の暑い日の月曜日に行き場所がなく、本当に今年の夏は困ったなと思っているところなんです。キッズ・プラザは確か月曜日も開いていると思うので、何とか夏休みだけでも、設立の依頼なってしまうのですけれど、月曜日に児童館を開けてほしい、というのはすごくあって、そういったところがあると毎日行く場所ができたり、そこで児童館の職員の人が今度こんなお祭りあるよとかイベントあるよと声かけができる。地域の方が日曜日に児童館を開けてくださってる場所もあるんですけれども。そういう形で何とか毎日、平日も祝日も関係なく子どもがどこかに行って過ごせる場所があるというのを保証していけないかな、とそ

のように思います。

**〇今村委員**

私も今の意見は重要だと思いまして、先ほど放課後の記載が重要だと申し上げたことが、一番の〇の四つ目で、放課後に安全で充実した場で、一人ひとりが興味応じた体験活動ができているという記載があります。ここは、今おっしゃったような児童館や学童クラブなど、いろいろなものを含んでいるだろうと思います。

ここはぜひ、より重点を置くような記載になると良いと思うとともに、今出た小学生の議論に限らず、私は中高生においても、放課後の豊かさに区がコミットするということが重要だと思っていますので、そこを強調させていただけたらと思っております。

今夏休みで私も今、中高生 115 人と合宿中で、4 日間の合宿の 3 日目に向けて今またこの合宿に戻るところなのですけれども、格差は本当に夏休みとか放課後から広がっていくと思います。私事ですけど、この夏はいろんな中高生との場を一緒にやっていて、無料で参加できるものをやっていたり、ちょっと費用が高いものもあります。ですので、費用が高いところにうちの子を送り出そうというご家庭のお子さんと一緒にいるときは、こういう体験できている子と、もしかしたら家で 1 人でゲームやっているかもしれない子の差というのは、夏休み中で広がっていくということをすごく感じます。放課後、夏休み、学校が手を離した時間帯を区がいかにフォローするかということを強調できたらと思いました。

**〇和泉部会長**

私も中高生の親として考えたときに、学校でもなく家でもなく、別の場所での方が実は勉強がはかどるっていうような話もよくされます。家の中ではなかなか集中ができない、いろいろ声かけされたり、集中できないというときに、コミュニティーセンターや図書館、そういうところにスペースがあると、はかどるんだという話をされて、では中野区の場合はどうなんだろうか。そういう中高生たちが例えば定期試験の前とかそういった時に勉強できるようなスペースというのがあるのかなと。

全般的に公立の図書館というのは、多くの高齢者の方が利用している状況があって、なかなか中高生優先に使いにくいというようなことがあって、近隣自治体の中にはそういった中高生を優遇するようなやり方をしているところも出てきているわけです。そういう中高生の居場所づくりというのもひとつ検討の中に入れたほうがいいかもしれないと思います。

**〇今村委員**

各論なんですが、なかのZEROが好きでよく行くのですが、そこに小さい中高生の学生スペースがありますよね。あの場所は少し使いにくいなと思います。職員プロジェクトチームの提案の中では中高生の居場所として杉並区と豊島区の事例が出ていますが、他にも調布市にはCAPSという中高生施設があるんですけれども、中高生が集まる居場所・施設の共通点は、ちょっと見えない場所にあって、調布市の事例では、あえて蛍光灯とかダウンライトなんかで暗めにしています。その一方でなかのZEROはガラス張りで、使う人はパイプ椅子を使ってくださいというのは、少し使いにくいと感じたりしています。

小学生の放課後、中高生の放課後それぞれ立地的な話でも、場所の作り方の話、安全性の管理の話も自治体ごとに少しずつ違うので、限られた施設のあり方、予算のあり方の中でどうしていくかという課題も大きいと思います。

**○城山委員**

学校も同様だと思います。2か月ぐらい前に学校建築の勉強会をした時に、富田玲子さんという方が作っている学校の話が出ました。その学校には、子どもが隠れられるようなスペースがいっぱいあるそうです。今の子どもたちは、学校の中で、ずっと同じ広がったところにいて、苦しくなってしまう子もいると思うんです。そういう子たちがちょっと逃げ場というか、例えば教室の中に少し畳の小あがりみたいなものがついてるとか、少しの工夫で学校が居心地よくなるっていうこともあると思います。同じように平等に学校を作らないといけないというのも、ある程度隠さないようにというのもわかるんですけれども。さっきの学校ごとの特徴というのとも繋がるのですが、子どもたちが、地域がどういう特徴を持つのかを考え、それぞれの地区の人たちも参加していろんなものを作っていくということも大切だと思います。学校も、同じようなものを作る必要はないと思います。

**○相川委員**

5の社会変化に対応した教育保育の後ろから2番目の部分で、AIが進化してと言った時に、ICTだけでいいのかと思います。理数系の教育を支援していくということが今後とても大事なことだと思います。

先ほど、なかのZEROの話もありましたが、なかのZEROで科学教室というのをやられていると思います。例えばそれの回数をもっと増やしていくとか、そういったこともできたらいいのではないかと思います。今は本当に限られた意識の高い親が、急いで申し込む人だけしか参加できないような状況になっているので、そこの枠を広げてもっといろいろ方が参加できるようにする必要があると思います。あとは、科学教室といったもの以外の科

目を得意な子どもたちが、これをやりたいと思ったときにスポーツだったら地域のサッカーやダンスなど、地域の方たちが行っているサークルに参加するということもあると思うのですけれど、それ以外に例えば美術を伸ばしたい子どもだったり、もっと社会の仕組みについて学びたいという子どもが選んで学べるような場というのを用意していけるといいと思いました。読む力というのは大事と言われていると理解していますけれども、理数系のステム教育と言われる部分に中野区は力をもっと入れていくですとか、読解力の高い子どもを育てるといったような、少し教科にも特化したものを進めていきたいといったことを今後打ち出していけると、中野区の学校ごとの個性もあるとは思うんですけども、中野区としての教育のあり方というのは、もう少し議論が深まっていくんじゃないかなと思いました。

**○染谷委員**

5番の社会の変化に対応した教育・保育というところで、下から4番目ですが、学びの連続性を重視した教育が必要であるというところで、幼児期からと書いてあるのですが、乳幼児期とここは入れていただきたい。0歳児の可能性はとても研究されているところで、ここから始まっているんだ、ということを声を大にして言いたいです。なので、0歳からのというところの年数をプラスしていただきたいと思います。幼児期からの何年間っていうところまでと言われています。0からのというところで、「乳」を足していただきたいと思います。

**○和泉部会長**

ご意見ありがとうございます。無償化の話と関係して、小学校に上がる前の子どもたちがどこで過ごすのか、保育所や幼稚園も含めた様々な施設があるわけですけれども、それを選択しながら年齢的にまだ家庭で保育したい、という保護者の方もいらっしゃって、その人たちがなかなか支援の底から漏れてしまってるというところもあるわけで、そういったところも含めた問題提起ということで、乳幼児という意味合いで理解をしたほうがいいかなと思います。

ではまとめについては一旦ここで切らせていただいて、審議会全体の答申についての話を少しさせていただきたいと思います。これまでの審議内容総括した子育て教育の全般に関する地域社会の姿というものを、盛り込んでいきたいなというふうに考えております。これまでの審議の中で、子ども目線でどうまちづくりをするのか、子どもの権利が守られるようなまちといったような中野の地域社会の姿というのがご意見として出てきていると

理解をしております。この部会で審議してきたことを総括するとどういった地域社会を目指すべきなのか、ご意見をいただければと思います。

また子育て先進区というキャッチフレーズもございますけれども、なぜこの子育て先進区を目指すのか、どういう姿・地域社会の姿というのが子育て先進区なのか、といったところにもご意見いただければと思います。少し口火を切らせていただきますと、先ほど城山委員から、地域社会とその経済との関わり、というご意見がございました。もちろん子育てをしていることというのが、今、生涯未婚であるなど様々な社会現象があって、子育てすること自体が贅沢なんだという見方っていうのがだんだん広がりつつあると。それは、本当はうまくなくて、当然、幼児教育の無償化も含めて子育てにかかる費用というのを軽減していこうと。特に教育費というのがとても高いんだということをだんだんと崩していこうというのはあるんですが、日本社会のこれまでの慣習もあって、結婚と子育てというのがどうしても結びついてしまっていると。なので結婚しないと子どもが産まれない、或いは子どもが産まれるから結婚するというような、そういう繋がりというのはどうしてもあります。

実際子育てをしている世帯というのを、統計調査で見ますと、年収でいうと平均とか中央値というあたりで言うと 700 万から 800 万円というような年収になってまいります。東京都でいうと高校の授業料が無償化の対象になる所得制限、大体 900 万円ちょっと超えたというところにありますけれども、それすらも超えてしまう世帯が多くなってきている、ということがあり、中野区もその例にもれない部分あるわけです。つまり子育てをしている世帯というのは、ある程度高所得の世帯が多いという状況のもとで、中野区の高い家賃や住宅ローンを払えるというそういう方々が多いという状況もございます。そういった人たちが住み続けてくれるということも一つ子育て先進区の一つのあり方かなというふうには思いますし、中野区が持続可能であるということを考えたときに、そういった人たちがきちんと住み続けることによって、税金を納めてくださるこういった部分も一つ経済の巡りの中では考えなきゃいけない。

逆に消滅していく自治体、と一度名指しをされた豊島区というのは今様々な改革をしてるところでございますけれども、待機児童をさっさとなくすといったことにも成功した区だ、というふうな認識はありますけれども、一つには住み続けてくれる住民が少ない、というところが一つの原因だったわけです。住み続けたいまちにするためにはどうしたらいいのか、それがひいては子育てしたいまちということにも繋がっていくのかもしれないと

いうふうに考えるわけです。皆様のご意見をちょうだいできればと思います。

**○相川委員**

私自身、中野で子育てをしていて、今は本当にいろいろな地域の方に知り合いも増えて、中野でこのまま子育てしていきたいと思っているんです。でも、実際は部屋が狭くて今後どうしようかなんて悩むこともあって、でもそれ以外に地域との繋がりがあるから住み続けたいと思うようになっています。そういった環境をどうしたらつくれるかというのは本当に答えがないことだとは思うのですけれども、困ったときに助けてもらえるというのも一つあると思います。それとは別に、中野区の特性として、子育てしようというときに区外に出る人が多いのもある程度もしょうがないと思うんです。でも、中野で若者が一人暮らしをしていた時に、地域の子育て世代・中野で子育てしているファミリーを見て、子育てっていいなと思えるような中野区であると、すごくいいと思います。中野では子育てしないけど、中野で子育てしていたようなファミリーのように、他の地域で楽しく子育てしたいなと思えるようなお手本となるようなファミリーがたくさんいる、とそういう中野区に、なれたらいいなと思っています。

**○安藤委員**

幼稚園の経営者をしているんですけれども、保育料の無償化と保育料の無償化は、子育て支援と、どうつなげていったらいいんだろうかと。要するに経済的な支援というのが一つの大目的であるのですけれども、他にやはり子どもの教育、保育。その辺をどういうふうに我々としてはこたえてったらいいのかなあと思います。今まで保育料、今のところ2万7500円なんですが、それではとても経営や運営ができないわけです。だからそれはわかりやすく差額ベッド代と言っているんですけれども、差額をいただいて、運営しているような状況なんです。ただそういう無償化の問題で、教育の質とつなげていくのか、どういうふうに我々はこたえていたらいいのか、その辺が今非常に不安で悩んでるところです。

この基本構想審議会ということで、将来を語る会だと思うんです。子どもの教育というのが経営も交えて、無償化の問題がどう影響していくのか。その辺が何か欲しいかなと思っております。

**○和泉部会長**

私が直接お答えするのはどうなのかなと思うのですけれども、無償化はもともと国が決めたことを各自治体もお金出せよというそういう仕組みになっておりまして、なかなか各自治体の財布状況もあって、どう実現できるのか難しいところがある。無償化というと、

どうしてもタダになるというふうに誤解している人が多くて、これまでどおり、実費の部分というのはあるし、また私立幼稚園の皆様というのが、安藤先生のところはどうか知りませんが、やはり保育所ばかり色々な補助金がついて、待遇改善なんかも保育士さんが中心だよということで、幼稚園の側がおいていかれた部分というのを今回消化できることでようやく足並みそろえられるかなというような辺りというのをいろいろお考えになっているというふうに伺っています。なので、結果的にタダだと思ったらタダじゃなかったというのが保育料の無償化の中では出てくるので、その中でどうみんなに納得してもらえるのか、結局無償化したんだけど、子育て費用の軽減にはなってないじゃないかというようなご批判というのがもしかしたら10月以降に出てくるのかなというふうに思ったりしています。ただ、それも予算の制約のある中で、子育てにかかる費用というのを少しでも軽減しようという、少子化というのが過去も40年近く続いてきたわけですから、その中でいきなりそれを止めるというのは難しいことかもしれませんけれども。少しでもこれから生まれてくる子どもたち、今育っている子どもたち、というのが育ちやすい環境というのを用意していこうと。これはもう国を挙げての一つの方針だと理解をしております。それをこの中でどう具体化するか、先ほど相川委員から給食費無償化という話もありましたけれども、給食費無償にしていたのは東京都独自の施策だったんですね。近隣の地域、東京都以外の地域というのはこれまでも主食費という名前で、月に数千円を徴収するというのをやってきた経緯があります。東京都だけしか知らないとなかなかその状況が見えにくい。では、東京都だけが給食費無料無償化すればいいのか、ただお隣の杉並とか豊島区、新宿区が無償化するという時に、中野がしないという選択ができるのか。そういう決断ができるのかというのはとても難しい、理解してもらえるのかなというふうに思いますし、そういったところに関しては本当に少しでもできることをやって、経済的な負担を軽減することが子育てを支援する一つの方法なんだ、というふうに思っています。

もちろん個々の幼稚園保育園の経営というのは、なかなか大変な部分というのはあるのは承知しておりますし、その中で子どもを中心に考えて、子育て支援ていうのがどうできるのかと。それを考えるのが、この基本構想審議会での役割かなというふうに思います。

**○今村委員**

子どもがどう育つまちにするか、という問いに私なりに自分の経験も振り返りながら考えました。私の場合は15年前に子どもがいない夫婦だった時代から中野で住み始めて、子どもが産まれた後、保育園に通うタイミングでもここで住み続けていこうと思いました。

新井の先のほうに住んでいるのですけれど、意外と重要だったのは中野駅周辺の再開発のことでした。四季の森の辺りが公園になり、子どもたちが水をジャブジャブしながら遊べる環境になったというのは私としてはかなりプラスのことで、このまちで子育てするといいなと感じられた大きな要因でした。なので、今回の基本構想が賞味期限10年という中で考えると、まだまださらに続く中野駅周辺の再開発というのが、子育て先進区というコンセプトのフラッグシップになるかどうかというのは、重要だと感じました。

目指すべき方向というのは資料に書いてあると思うんですけれども、ハード面・ソフト面・コンセプトを具体化するとどういうことなのっていうものを示せると、これが中野区のどこになるのかということだと思いました。そう考える、具体的に成功事例を思うと、柏市の柏の葉エリアはすごく柏市の目指す教育コンセプトを実現するエリアとして、教育移住が今増えている地域だそうです。もしかしたら、これまでだったら港区に住もう、文京区に住もう、渋谷区に住もうと思っていたかもしれない保護者達が、ＴＸ（つくばエクスプレス）沿いの柏の葉に集まっていると。教育資源が集中していて官民連携した学びの場がたくさんあって、デベロッパーや不動産屋ともうまくタッグを組みながら、住める住環境も整ったという成功事例だと理解しています。ただあのエリアは、ほとんど原っぱから始まっているので、すでに文化と歴史の積み重ねがある中野区で、どこでそんなことが可能なのかで考えると、必ずしも簡単ではないのですけれども、せっかくならばこの十年間、この中野駅周辺の再開発にこのコンセプトを埋め込むということができるといいなと感じました。

**○和泉部会長**

それは何かモニュメント的なもうアピールできるようなものが必要っていうことですか。

**○今村委員**

モニュメントというよりも区民や子どもたちにとって使えるものになるか、中野駅周辺が当然区にとっては観光的な資源でもあると思うので、商業的な要素・観光的な要素も重要になると思うんですけれども、私たちが子育てしながら使いたい場所で、子どもたちが自分たちの学びにおいて使える場所になるかどうかという観点も外れないといいと感じます。

**○城山委員**

その子ども目線の地域社会ということで、再開発などをする時もそうだと思うのですが、例えばスウェーデンでは、昔、その土地にあった工場とかを模した、小さな木のミニチュ

アのものがたくさん置いてある子どもの公園が作られています。子どもに分かりやすい表示も、公園などのいろいろなところに書いてあって、その地域の歴史を思い起こすような遊び場などもあるんです。他の部会に関わることかもしれませんが、地域アイデンティティーも中野に住み続けてもらうことを考えると重要ですね。再開発をしても、そうやって子どもたちが学びながら自分たちのところはいいなって思えるようになるっていうことを考えると、子ども目線でいろいろな設計をしたり、表示をしたりとか、地域の土地の歴史を思い起こすような工夫をしていくべきだと思います。例えば、井上円了でしたっけ、今、妖怪の点字をやっていますよね。ああいうのはとても面白いですよね。子どもが楽しいと思うんです。また、そういうのを生かして、普段から街の中でそういうことを遊びながら学べるような、そして中野ってこういうところなんだっていうふうに記憶を持ってもらえるような工夫っていうのをしていけばいいのではないかと思います。

**○和泉部会長**

その他ございますでしょうか。よろしいですか。

**○相川委員**

中野区から転出してしまう家庭の人が、他の地域に何を求めていっているのかなと思ったときに一つ思い浮かぶのは、自然環境なのかなと思っています。一つは、大きな公園っていうのもありますし、やっぱり山の中で自然に溢れ、自然と触れ合って育って欲しいっていう方が、結構郊外のほうに行ったりですとかそういうケースをよく聞いたりしています。中野区も限られた自然ではあるのですけども、その自然を生かした体験ができるようなまちになって、それはプレーパークも一つの形だと思いますし、自然のままが残っている江古田の森を生かして、今民間の方がそういった活動されていて、私も参加させていただいているんですけれども、そういったことを例えばアピールしていく、というのも良いと思いました。

つけ足しですけれども、再開発の話についても、私は共感していて、今中野区がすごく動いている時代で、今このチャンスを逃したらもう次の再開発も何十年後ということになると思いますし、そこで大きな再開発をした時にただオフィスビルがあるだけではなく、子どもの視点というのは、そこには絶対入れていただきたいと思っています。あと、歴史の哲学堂公園の話も、近くに住んでいるのでとても共感するんですけれども、歴史民俗資料館も今改装するといいうことで、そこを生かして、遠足でももちろん通っているとは思うのですけども、普段から子どもが行って歴史を学ぶということができるのはとてもいい

と思います。

審議内容に戻ってしまうんですけれど、地域の歴史を学ぶっていうことを、日本の歴史を学ぶということも入れられたらいいのかなと思います。最近若い方は日本がどこと戦争して勝ったのか負けたのか知らない方がいるというニュースも見たりして、びっくりしたので、そういう基本的な歴史文化を学ぶということもとても大事だと思います。そういうことをきちんと学べる中野区であって欲しいと思います。

**○和泉部会長**

それでは本日の議事はこれで終了とさせていただきたいと思います。本日ご審議いただきました内容を踏まえまして事務局と調整した上で、第3回の全体会の資料を作成したいと思います。作成した資料につきましては別途部会の皆様にメールや郵送などを通じて確認をしていただきたいと思っております。

最終的な答申につきましては全体会でまとめていくことになりますので、本日の第5回をもちまして子育て・教育部会での審議は最後となります。これまで子育て・教育部会の部会員の皆様には審議等にご協力をいただきまして、ありがとうございました。臨時委員の皆様につきましては、会議にお集まりいただくのは今回が最後となります。部会員の皆様には感謝申し上げます。ありがとうございます。

委員の皆様につきましては次第の下に記載がございますけれども、次回は9月27日の金曜日、最終回となる次次回につきましては10月18日金曜日、それぞれ19時から会場は中野区役所を予定しているとのことです。

以上をもちまして、中野区基本構想審議会子育て・教育部会第5回を閉会させていただきます。ありがとうございました。

―― 了 ――